



フォルモサの祈り ～台湾・高雄日本人学校の贈り物～

終章 緑なる中山陵 より抜粋 (2002年 創友社)

終章 緑なる中山陵

※

文部省の海外赴任者の選考において、こんなことを質問されたことを思い出す。

—あなたは日本と海外の架け橋になりたいと書いていますが、架け橋とはいったい何ですか。

その時、答えにつまった。何気なく使っていた「架け橋」という言葉の意味をよく理解していなかったのだ。恥ずかしながら、満足な返答ができなかった。帰り道の足取りが重かった。そして台湾での三年間、さまざまな人とお会いしていくなかで、自分自身も架け橋の一人であることに気づくことができた。これも、台湾で「今」を真摯に生きるその「想い」を語ってくださった台湾の方々のおかげである。架け橋とは、人間そのものである。想いを持った人間同士が、架け橋として心のキャッチボールをする。そこに、「出会い」が生まれる。

人と人は、つながっている。まるで、お互いが引き寄せ合っているかのように人が出会う。しかし、出会いは待っているだけではやって来ない。その人たちと同じ目の高さでつながった時に、新しい人との出会いが始まる。人と人を結びつけるのは、法律や条約もさることながらやはり直接の出会いが重要だと思う。海外にいたからこそつかんだその大切さを、日本に戻ってからのさらなる「出会い」につなげて行きたいと考えている。「台湾との出会い」は、自分自身にとっても日本を見直すことにつながった。海外から祖国を見る。しかも他国の人の目の高さで見るという経験により、今まで見えなかったものが見えてきた。日本に生きる日本人も、「日本人とは……」という問いを真剣に考える時期に来ていると思う。そして、隣人であるアジアを大切にしながら、日本人としての自分の「想い」をしっかりと語ることが求められているのではないだろうか。